

會



報

1964年12月

236

日本山岳会

カイザー元帥の印象

三田幸夫

インドのネール首相が逝かれて間もない頃、カトマンズの神原君からの電信でカイザー元帥の突然の死を知らされ、甚だ驚くと同時に、誠に惜しい人を亡くしたものと等しく哀惜の念に駆られた次第である。本会と横さんから早速電報が打たれたが、最近ネパールから東京に帰っておられた神原夫人の話によると、元帥はその前日は或るパーティーに出席されていた程お元気だったらしく、只、ネールさんの死後は、インド、ネパール間の色々な問題で非常に心痛がれていたらしく、ネールさんの死によるショックがかなり影響していたのではないかとという噂もあったとのことである。ネパールにとっても、元帥の存在は、丁度明治維新直後の日本の元老達のような大切な存在で、国の将来を憂うる最も重要な人の一人であったと思われる。

僕が初めて元帥にお目にかかったのは、一九五三年のマナスル遠征の時、当時は、外国からの登山隊等がカトマンズ入りをする、第一に国王その他政府の高官連に儀礼的な挨拶に赴く習慣があった。僕達の沢山あった公的な訪問先のリストには、ネパールの元老であり国の実力者であったカイ

ザー將軍（その時は未だジェネラルであった）の名は、国王、王子を除いて筆頭にあった。

三月廿四日、僕のほかに隊員全部が定刻きっかりに將軍邸の玄関に参上した。（ネパールでは、万事のんびりしていて、一般には時間的にかなりルーズだが、こういった公式儀礼的な訪問には寸秒もおろそかにしないという正確さもある）

將軍は数名の侍臣の担ぐ輿状の椅子に坐したまま現われた。將軍は当時、かなり健康を害していられた様子だった。そして玄関に続く広間に通されると、將軍は普通のソファに坐り、僕達はそれを囲み儀礼的な挨拶の後になんか打ちとけた歓談に移った。

おみやげに贈呈した日本刀はお気に召したらしく、鞘をはらって刀身をためつすがめつしながら曰く、自分にも所蔵の刀があるからと、従者に命じて一振りの日本刀をとりよせた。英国のマウント・バッテン將軍が終戦時、日本の一將校から贈られたものを貰ったのだという。僕は刀剣に関してはめくらなので、少しは目の効きそうな加藤泰安に廻す。一応陸軍の將校だった泰安の結構なものですとの返事に將軍は満足そうに見え

たが、後での泰安の話によると、戦時中大量生産された例の昭和刀だろうとの事であった。

將軍は、日本に関してもかなりの知識を持っており、特に同じアジア民族からなる日本の登山隊には少なからぬ好感を持っていた。そして何でもお手伝いするから遠慮なく言ってくれとの甚だ好意的な申出であった。そして雑談中に僕達が洩らした、隊の食糧中、アルコール飲料の甚だ欠乏している話を覚えていて、大したものはないが、若干お届けしようという事になった。山へ出発という日の早朝、その約束は守られ、二人の家庭臣がスコッチとラム酒を一打宛届けてくれた。ヒマラヤでは大変な貴重品で、その最初の口開けはキヤラパンの5日目、ティルマンの丘でのキャンプ、僕の53回目の誕生日の宴を甚だ豪華なものにしてくれた。

將軍と日本との繋がりには、僕達山の仲間達より遙かに前からあった。マナスルからの帰路、カトマンズではまた、何回か將軍にお目にかゝる機会があった。カクティに招かれた或る晩、カイザー邸の二階の客間は甚だ寛いだふんいきであった。そこには、往年の入江たか子と思わせる麗人と、フランス中世紀の貴族の子弟の様な美しい服装を纏った可愛らしい五六才の少年がいた。

たが、後での泰安の話によると、戦時中大量生産された例の昭和刀だろうとの事であった。

將軍は、日本に関してもかなりの知識を持っており、特に同じアジア民族からなる日本の登山隊には少なからぬ好感を持っていた。そして何でもお手伝いするから遠慮なく言ってくれとの甚だ好意的な申出であった。そして雑談中に僕達が洩らした、隊の食糧中、アルコール飲料の甚だ欠乏している話を覚えていて、大したものはないが、若干お届けしようという事になった。山へ出発という日の早朝、その約束は守られ、二人の家庭臣がスコッチとラム酒を一打宛届けてくれた。ヒマラヤでは大変な貴重品で、その最初の口開けはキヤラパンの5日目、ティルマンの丘でのキャンプ、僕の53回目の誕生日の宴を甚だ豪華なものにしてくれた。

將軍と日本との繋がりには、僕達山の仲間達より遙かに前からあった。マナスルからの帰路、カトマンズではまた、何回か將軍にお目にかゝる機会があった。カクティに招かれた或る晩、カイザー邸の二階の客間は甚だ寛いだふんいきであった。そこには、往年の入江たか子と思わせる麗人と、フランス中世紀の貴族の子弟の様な美しい服装を纏った可愛らしい五六才の少年がいた。

の古ぼけた写真を皆の前に持ち出してきた。若き日の元帥とその従者達が多勢の日本人に取り囲まれた写真である。その中の一人を指して、これが田口君のお父さんだ」と説明した。將軍は戴冠式の帰路、米国から日本に向う船中で田口父君と知合い、偶然、田口父君が重役をしているインド製鉄会社の大株主がたまたま元帥であることが解り、大いに親交を増したというわけ、そして田口氏の招待で神戸の料亭に元帥一行を迎え、長夜の宴を張った時の写真で、奇しくもその息子の二郎君が、カイザー邸のパーティーで大いにマナスル隊のために *Liaison* の役を果してくれたのであった。

その後又、十年ぶりに僕は元帥にお目にかかる機会を得た。一九六三年六月、エヴェレスト登山の許可申請のためカトマンズを訪れた際である。

元帥邸は昔年らの立派なもので広い邸園も奇麗に手入れされていた。が、玄關に僕達を迎えたのは元帥唯一人で、家人は一人も姿を見せなかった。案内役の神原達君は、元帥邸のライブラリーにかなり自由に出入りのできる元帥のお気に入りのようだ。元帥の蔵書の豊富な事は有名で、神原君のネパール文献の研究にはこのライブラリーが役買った事と思われる。僕達二人は、大きな書棚の並ん

だライブラリーの一隅に通され、形式ばらぬ訪問に寛いだ気持ちで挨拶の後、十年に亘って吾々に寄せられた変らぬ御好意を謝し、更に今後のお力添えをお願ひした。心配していたお身体も至って元気そう、淡々とした又ユーモラスな話しぶりは十年前と余り変わらなかった。



(あいさつをするカイザー將軍
左端は將軍夫人 神原 達撮影)

その風貌が山岳会の高頭仁兵衛さんそっくりだった。が、今度は、話しているうちに、その話ぶりや元帥の辿った過去の政治的経歴、国の歴史等の面から、僕はセイロンの元首相サー・ジョン・コテラワ氏の事を思い出した。同氏は大戦後英国から独立したセイロンの指導者として活躍し、コロンボ会議の主唱者の一人でもある。僕

は彼の経営する鉱山との取引関係から知り合ったわけであるが、彼の著書「AN ASIAN PRIME MINISTERS STORY」を贈られたことがある。インドの一部といった存在であった小さな島セイロンが、大戦後独立した経緯、その間彼の辿った路が甚だ興味深く書かれている。

何か、この東洋の二つの新興国の指導者の間に一脈相通する気魄が感じられたので、この本の話を持ち出すと、あゝそれなら好く知っているよ、自分もコテラワ氏から贈られてそこに蔵ってある」と後ろの書棚を示した。二人とも、明治維新の革命(レボリューション)と言った)に興味を持ち、その後の躍進ぶりに敬意を示す日本のよき理解者である。

この頃、カトマンズの政庁、特に外務省はパキスタンのアユブカーン大統領の公式訪問を迎えるので大変な騒ぎであった。インドと中共は国境問題紛争のさ中であり、またインドはパキスタンとカシミヤ問題で頭の痛いまっさい中である。そういった大に国境を接しているヒマラヤの王国ネパールは誠に微妙な立場にある。

僕はこの日、町の一角で群集に交り、パキスタン大統領のパレードが空港からやってくるのを見物した。丁度広いロータリーのある場所、そこで大統領は空港からの自動車公式の馬車に乗り換え

る所だった。よく晴れた日で、着飾った騎馬の儀仗兵連の姿は、カトマンズの街や遠く霞んだヒマラヤの前身を背景に絵のように美しかった。その大統領の馬車に続いて随員、ネパール側の大官達の自動車行列が静かに続いていく。カイザー元帥夫妻の正装した姿もその先頭の車の中に見られた。

僕のカトマンズ訪問も丁度この騒ぎにぶつかったわけで、外務省要路の人をつかまえるのには骨が折れた。が、神原君の顔とその適切なアレンジメントによって総ては順調に運ばれ、僕の使命も一応果され、一九六六年日本山岳会によるエヴェレスト登山に対するネパール側の了解も得られる事になったのであった。

そこで、パキスタン大統領の立った翌日、五月十二日の夜、カイザー元帥夫妻を主賓に色々お世話になった外務省の連中をホテル・ロイヤルの晩餐に招く事にした。

その夜のお客さんは、外務省からは、大臣のカトリ少将、タタール儀典課長、ラナ次官ほか担当事務官等とその夫人達、それにナラ大將夫妻で、皆定刻七時三十分の前にはロビーに顔を揃え、日本の連中がよく知っている例の歴代ラナ家の將軍達の肖像画が並んでいる広間に入っていた。

カイザー元帥夫妻も定刻にはこの部屋に顔を見せ、主人役の僕の左には元帥、ナラ大將夫妻、右に

は元帥夫人、カトリ大臣といった具合に席についた。顔の広い神原夫妻は他の外務省の連中の中に混り稍々固くなり勝ちなパーティーのふんいきを和らげてくれた。

最初、僕が立って「十年ぶりにまたこのカトマンズを訪れ、国民の皆さまから温かく迎えられる、なつかしさと嬉しさで一杯である。はからずも日本の登山隊がくさび

となって両国間の親交は益々深まり、ネパールからも王室一家を始め毎年のようにお客様を迎え誠に喜ばしい。今日では日本からの登山隊も十指を数える程になり、何かと大変お世話になっているが今後共宜敷くご指導とご援助をお願いしたい。僕の今後の使命もお国の聖なる山、地球上で一番高いエヴェレストに登りたいため六六年度の入国と登山の許可を得る事が目的であった事は皆様ご承知の通りで、お蔭様でここに列席されている皆様の深いご理解とご協力に依って昨日政府の仮の許可を戴いた事を心から喜び感謝している。この旨早速東京のJACにも打電したので仲間達も定めし喜んでいる事と思う」といった意味の事を中心に極めてインフォーマルな形で挨拶をした。下手な僕の英語ではあるが、大体の僕の言わんとする事は解って貰えたようである。

元帥は続いて立ち、ヒマラヤを通して両国間の人や文化の交流が盛んになり、今迄あんなに遠く離

—依田孝喜撮影—

うであつたが、時々会話の最中に口には手を当てゝあくびをかくそうとしてゐる様子が氣にかゝつた。その僕の氣配を察したのか、僕にそつと耳うちををした。『実は、ずつと連日連夜、アユブ・カーンの接待で奮闘続きなのだ。で、昨夜は到々ほとんど寝てゐない。甚だ愉快だが眠くて仕方がないから少々早く目に引上げさせて貰いたい。』『早目に引上げさせて貰いたい。』『悪しからず』。というざつとばらんな話であつた。そして間もなく夫人にいたわられながら、寢たけなわのうちに帰つてゐた。

寢は皆うちとけてまことに楽しかった。終つた後、僕と神原君夫妻は猶残り惜しげなナラ大將夫妻をホテルのバーに誘つた。そして更らに寛いだ幾刻かを楽しんだ後その最後のお客様を静かなカトマーズの夜の街に送り出した。

それから一年の余、今の文章をしたためながらあの元帥にもう一度會う事の出来ない寂しさを味わつてゐる。そしてあの夜、帰りが最後に元帥と交わした握手の温かく柔い感触が今猶ほのに残つてゐるような氣がする。

モーリス・エルブーク氏の今回の来日は、フランス・スポーツ相としてオリンピック大会に参列するためのもので、十月七日夜羽田に夫人同伴で到着、十月二十五日夜帰国というスケジュールであった。この間、小生は大秘書という資格で行動をともにした。

昨年の二月、シャモニで一緒にスキーをして別れてから一年半ぶりの再会であったが、今回は四五才までの独身生活に終止符を打ち今夏七月二三日にマリイ・ピエール夫人と結婚してから、はじめての海外旅行だったので、九月二四日パリ発、途中、東南アジア方面を回って来日したわけだった。

来日と同時に多忙な日程がぎっしりで、都内の各競技場のみでなく、戸田橋のボート、八王子の自転車、相模湖のカヌー、江の島のヨットと、フランスの選手が出場する競技にはすべて顔を出さなければならず、この間、昼と夜は連日、役員、コーチ、選手、報導関係、他国チーム役員などとコクテルと会食があり、真にめまぐるしい日程であった。こうしたレセプションはいささかお義理のものが多かったが、山岳会主催のお茶の会は、山仲間の集りだけに、なかなかふんいきで、エルブーク氏

近藤等

の来日申最も楽しい会合の一つであったことを確信している。ただ当日も昼はヒルトン・ホテル、フランス・ジャナリストを招いた昼食会があり、定刻よりおくれて文化会館に到着、松方会長をはじめ会員諸氏をお待たせしたことをお詫びしなければならぬ。短時間の会合であったが、エルゾグ氏は会員諸氏と語り会ったことを非常によろこび、集って下さった会員一人一人のことを、その後も小生にこまかくたずね、日本のアルピニストに関する知識を深めようとしていた。

多忙な日程であったが、私は強引に三日間をつくって京都奈良に連れて行った。エルゾグ氏に休養してもらいたいのと、夫人に日本の古いよさをゆっくり味わってもらいたいという希望からだだったが、これは成功したようで、夫妻も、大臣と令夫人であることを忘れ、シャモニでスキーをしていた時と同じモリスとマリー・ピエールにかえり、歌など歌い合ってゆっくりくつろぐことができた。宿泊もホテルにしないで日本旅館にしたが、とくに日本の木の風呂が気に入る、フランスに持参する方法を相談するなど、なかなかふんいきに終始した。

エルゾーグ氏はすでに六二年の秋に数日東京を訪れたが、当時まだ形もなかった高速道路や競技場のすばらしさに驚嘆し、四年後に冬季オリンピックを開催するグルノーブルも東京を二本としなければならぬことを痛感しているようにであった。いま一つ、日本人のスポーツに寄せる関心の深さ、スポーツ施設の充実、大学の教育課程にまでスポーツが必修科目として入っていることなどを非常にうれやましく思っているようであった。

今回のフランス・チームの成績は、冬季のインスブルック大会のはなばなしにくらべて真にふるわず、優勝候補の水泳のキャロン、ゴドバレス、陸上のジャージ、フエンシングのマニャンと次々と金メダルが失なわれて行く有様で、感情家のエルゾーグ氏はその度毎に涙をうかべるのを見て、同行している私もつらい思いでいっぱいだったが、閉会式の直前、馬術大障害ではじめてフオリオラが優勝、ラ・マルセイエーズが高らかに鳴りひびいた時には、エルゾーグ氏の眼にはじめてうれし涙が光るののを見て、肩を叩き合っていることがあったことだった。その翌日の夜、グルノーブルでの再会を約してエルゾーグ氏は帰国の途についた。

(付記)

ここ十年間、日本を訪れたフランスの代表的なアルピニストの顔

ぶれを列記すると次のようになる。短期間の日本滞在の人が多かったため会員諸氏に紹介できなかったケースが多いが、今後はなるべく多くの方々に接していただく機会を持てるように努力するつもりである。

ローツェ・シャル計画 競合についての顛末報告

日本山岳会
理 事 会

今年七月末より九月中旬にかけて、

東海支部と早稲田大学山岳会が同時期にネパール・ヒマラヤのローツェ・

シャル峰（八、三八三）の登山を計画したために、関係者の間に大きな話題を提供した。既にこの間の事情については、ご存知の方も多いと存じますが、会報の議事録のみでは説明不十分

の点もあると思いますので、ここにこの問題についての経緯を順を追って説明し今後の参考に供したく存じます。

本件は、本会理事会の海外登山に関する説明、連絡の不備が直接の原因となっており、この点、深くお詫び致します。

尚今後は、理事会としても、この種の連絡には手落ちのない様努力致すつもりですが、各支部におかれども、支部の名において計画を立案する際には、事前に詳しく、理事会に対し、連絡をとれることを切望致します。

一、東海支部長より七月二十日付、左記のとおり「ヒマラヤ登山承認願」が提出され、この問題が発生した。

「一九六五年プレ・モンスーンに於ける、ネパール国、ローツェ・シャル峰（八、三八三）の登山を別紙

計画により、万全の注意をもって試みたいと存じますので、ご承認下さいますようお願い致します。

なお、本計画の実施にあたっては経済面はもとより外貨の取得に関する折衝等すべて当支部で行い、本部にご迷惑をおかけしませんが、精神的な面のご支援を賜はりますよう、よろしく願ひします。

本件については七月二十八日の臨時理事・評議員会できり上げられ（会報二三四号十頁議事録参照）その席上、

（イ）本会としては、昭和三十九年度のスポーツ外貨割当てで早大のローツェ・シャル計画に決定しており、しかも外務省を通じて正式に登山許可を申請中であるので、外貨の面での協力はできない。

（ロ）東海支部は非公式ながら、既に直接ネパール政府と折衝し、ローヤリティの一部を支払済みである。これによりネパール政府が優先権を与えるというのであれば東海支部の計画が優先しても止むを得ない。この場合には同計画につき、積極的援助を惜しまないことを諒承する。

いずれにしてもこの問題は、本会としていずれか一つに決定するといふのは筋違いであり、あく迄もネパール政府の決定に従うべきである。しかし乍らいづれにしても計画遂行上、早急にネパール政府からの返事がなくとも準備に支障を来たすので、この点、在カトマンズの会員神原達氏に側面から調査依頼することにした。

二、当会並びに両当事者がネパール政府からの正式な決定を待っていたところ、八月三十一日付、外務省より情文第二一〇五七号を以て当会へ、調整依頼があった。

日本山岳会会長殿
外務省情報文化局事業部長
ローツェ・シャル登山
について

貴方ご承知のとおり、早稲田大学山岳部と日本山岳会東海支部双方より明年プレモンスーン期のローツェ・シャル峰登山申請がでておりますが、ネパール政府側で一時期における一山一パーティの方針をとっており、事前にお互いの方針を調整の上、しかるべき結論を得られたく、お願いいたします。

これにより、本件は、ネパール政府の返事をまつまでもなく本会として何らかの結論をだす必要が生じた。この件について、早速九月三日の定例理事・評議員会で審議されたが、理事会としても簡単に結論がだせないで、席上、海外登山審議委員会の委員に対し、双方より事情を聴取し、しかるべき方針を理事会へ報告する様、付託された。

三、海外登山審議委員会では、この問題につき、直ちに両者の意見を聞くため、翌九月四日午後、第一回の審議委員会を八重州竜名館に招集し、日高委員長以下、三田、成瀬、堀田、望月辰治、金坂、松田の九委員が、東海支部須賀支部長、関口、原、石原、中世古、橋村の諸氏から計画の経過並びに希望につき更めて事情を聴取した。早大側はたまたま、隊員候補者が箱根で

合宿中のため、その帰京を待って九月七日夜、日本山岳会ルームにて、渡辺、堀田、加藤、辰沼、金坂、松田の各委員が、早大側、河合部長、山崎、近藤、錦木、浜野、成川の諸氏から事情を聴取した。

その結果、両隊ともお互に他隊の計画を知らずに夫々の立場で計画しており、両隊とも優先を主張しており、計画を延期、変更することも、合同して隊を出すことも考えられず、話し合いによる調整は困難であることが確認された。そこで九月四日夜、八重州竜名館に第三回の審議委員会が招集され、三田、渡辺、望月、深田、加藤、辰沼、折井、金坂、松田の各委員出席のもと慎重審議の結果、左記の様な答申案がまとめられ、文書を以て理事会へ報告された。

昭和三十九年九月九日
早稲田大学、日本山岳会東海支部のローツェ・シャル競合に関する、日本山岳会海外登山審議委員会の委員に付託された審議に対する答申

一、日本山岳会がローツェ・シャル登山に関しては既に昨年十一月日本山岳協会に対して、早稲田大学を推薦し、同協会より日本体育協会に一九六四年度の外貨の割当てを申請しその決定を見た。

一、東海支部の本件に対する日本山岳会理事会への承認願は本年七月に始まり前項理事会の決定を見た後に発生した問題で、日本山岳会としては、本件を再び取り上げることにはできない。

一、前二項の理由により審議を付託された審議委員会としては、早稲田大学

日本ネパール文化協会発会式
十二月五日（土）午後一時三十分、
国際文化会館、会長あいさつ（日高信六郎氏）、経過報告（川喜田二郎氏）、協議、懇親、映画会など。

なお来年、つまり一九六五年の四月には、レビュー夫妻の再度の来日がほぼ確定している。期間は約二十日間、朝日新聞社の後援で、映画会と地の間に各々を各地で六回ほど上演することになっている。

一九六二年
モリス・エルゾグ
一九六四年
モリス・エルゾグ夫妻
ユベールエルゾグ
アンリ・ド・セゴニユ

一九五七年
ガストン・レビュー夫妻
一九六〇年
J・J・ラングパン

一九五五年
マルセル・イシャック
エドワール・フレンド
プロビス・シャベル

一九五六年
ジュラル・ジェソ
一九五七年
ガストン・レビュー夫妻

案を支持することにした。
付帯意見

審議委員としては、早稲田大学案を支持し、東海支部案の推薦を不適当とする判断をしたが、尚東海支部が他の山に目標を変更する場合に日本山岳会としては、出来る限りの援助を希望する

海外登山審議委員会
委員長 日高信六郎
代理 三田 幸夫

四、海外登山審議委員会の答申にもとずき九月十三日、臨時理事会が開催され(会報第三三五号議事録参照)早大側を支持する旨の結論がでた。この結果は、松方会長より、須賀支部長に連絡し諒解をうることとし、外務省に對しては九月十五日付日岳発第九号をもって左記の通りの回答がなされた。
昭和三十三年九月十五日
日岳発第九号

社団法人日本山岳会

会長 松方 三郎

外務省情報文化局

文化事業部長殿

ローツェ・シャル峰登山
について

八月三十一日附貴輪拝誦致しましたので掲載について、要旨を御説明致し御回答申し上げます。

(一) 問題のローツェ・シャル登山について、日本山岳会として、昨年十一月日本体育協会関係のスポーツ外貨割当に関連して、協議致し、東京外語大学南米遠征隊(四、〇〇〇弗)と、早稲田大学ローツェ・シャル遠征隊(一、五〇〇弗)とに振向けることを決定致しております。
(二) 当時は本会東海支部の問題は出て

おりませんでした。然し乍ら東海支部では、その後現地に於て入山手続きをとり、入山料の一部を払込み日本山岳会本部の承認を求めて来たものであります。

(三) 日本山岳会としては、現地において、とられた手続も全く無視することが出来ないと考え、東海支部の件については決定を保留しておりますが、ネパール側の登山規則により現地手続以前に、本国政府の正当な手続を経ることが必要であること云々のでありますので、自然今回の場合は早稲田大学の申請が優先するものと考えます。

四、両隊の間の調整の問題は、実際上は非常に困難なことも考えられますが、尚その可能性について両隊とも話し合いを進めたく考えております。唯このことはあくまで主たる問題点ではないのでありますから、前記の事情により、手続としては、早稲田大学の申請の方を進められるのを適当と考えます。

(四) 貴輪には「両関係当事者の意見を調整」するようにとありますが、登山のことでありますので、この調整は実はかなり難しく、調整を待つて処理する云々ことは、時期を失することになろうと考えられます。

(五) 尚、この日本山岳会としての回答は、二者の中何れが登山隊として優れているとか云々問題に触れたものでなく、早稲田大学遠征隊が国内的の手続を既に経ており、従って日本山岳会はその方が優先すべしと考えていることを申ししたに止まります。この点を申添えます。以上
五、なお、これとは別に、九月十四

日頃、ネパール政府より、東海支部に對し、残念乍ら許可できない。従ってお預りしてあるロイヤリティの半額は返送する旨の連絡がもたらされた。又九月十九日には早大に對しても同様の断わり状が届いた。

六、その後、東海支部長より、九月十八日付左記の通り、計画を一九六五年のポスト・モンズーンに延期する旨の連絡があり、一応この問題は終止符をうたれることになった。

昭和三十三年九月十九日
日本山岳会会長
松方三郎殿

日本山岳会東海支部長
須賀 太郎

一九六五年ポストモンズ
ンにおけるローツェ・シャ
ール峰登山の申請について

このたび一九六三年プレモンズンにおけるローツェ・シャル峰登山については早稲田大学が実施することになりましたが、当支部における進行中の諸準備をも考慮されて、一九六五年ポストモンズンには是非とも当支部の計画をご承認下されたく、外貨の割当等について格別のご配慮を賜りたく、ここに書面を以てお願い申し上げます。

なお、同峰が早稲田大学によって登頂された場合は、チョーオエー等の八、〇〇〇米峰に目標を転じたく考えておりますので、この点をお含みおき下されたく申し添えます。

七、その後十月一日の定例理事・評議員会で(会報二三六号議事録参照)この問題は左記の通り報告された。
「海外登山審議委員会に付託された審議答申に基き、松方会長、須賀支部長で

話し合いをしていたが、その結果同支部よりポスト・モンズンに時期を変更する旨の申入れがあったので、改めて、昭和四十年年度行事として海外登山審議会で取上げてもらうことにした。これにもとづき、十月五日付、昭和四十年度スポーツ外貨申請のための登山計画書、必要外貨明細書の提出方依頼したところ、一九六五年プレ・モンズンにマカルー東南稜に計画を変更した旨の計画書が提出された。

一方早大側は、当会の決定後九月十八日、浜野隊員を現地に派遣し、折衝に当たった結果、十月四日付正式に、ローツェ・シャル峰の登山許可を得た模様である。

これにより今回のローツェ・シャル事件は、すべて解決した訳であるが今回の競合問題は、本会の周知が徹底せず、事務連絡に不備な点もあり、このために種々と当事者はじめ会員各位に御心労をおかけする結果になりました。これを重ねてお詫び申し上げます。
(三九・十・六)

昭和三十三年年度国際ス
ポーツ行事用外貨申請の
経過について

昨昭和三十三年、十一月末、例年通り海外派遣行事の計画集計を締め切った。今回特に会告を出さなかった為か次の三計画しか提出されなかった。

一、京都大学士山岳会

K12登山及びシアチェン、バル

トロ氷河横断遠征計画

二、早稲田大学山岳部、稲門山岳会

ローツェ・シャル登山計画

三、東京外語大学山岳会

行 事 名	派遣期間	人 員	旅費総額 円	携行外貨 ドル
K12登山及びシアチェン・バルトロ氷河横断遠征計画 (京都大学士山岳会)	1964年 4月 12月	隊長以下 8名	1,610,000	11,182
ローツェ・シャル登山計画 (早稲田大学山岳部・稲門山岳会)	1965年 2月 6月	隊長以下 9名	1,605,080	11,500
ポリビヤ・アングス探検登山計画 (東京外語大学山岳会)	1964年 3月 8月	隊長以下 9名	1,530,000	4,000
総 計			4,745,080	26,682

ポリビヤ・アングス探検登山
昭和卅八年十二月月中旬、休協当局より、至急来年度計画を提出するよう要請があったので前記計画をそのまま十二月廿五日に提出し、特に海外登山審議委員会の審議は省略した。提出内容は別表の通りである。

本年、一月に入り、休協当局と折衝を開始、本年度の携行外貨が例年より著しく多いことに関する説明を行っていたが、一月二十七日付京都大学士山岳会会長よりK12計画中止の方の連絡があった。従って、申請外貨額は一挙に一万五千五百ドルに下り、例年の許可額と大差ないので、前記三計画の内早大と外語大の分が三月下旬自動的に認められることになった。以上
(村木)



辰沼広吉画

海外だより

ドルジェ・ラクパと
ガンチェン・ポの試登

英瑞合同のガネシュ・ヒマール遠征隊の内三人が六月八日（一九六四年）ジュネーヴのクワントン空港に戻って来た。四人の内この三人はカントン・ヴァレーの人で Michel Darkelay と Ami Giroud と Michel Rey。前の二人はガイド、レイはアマチャー。資金を出したのはジルーの山の顧客であり友人でもある英人の Stalshurg 卿である。多分ダルブレールは JAC 会報（三八年十二月）と「山と溪谷」（三九年六月）で紹介した、アイガー北壁の単独初登攀者（一九六三年八月、十九時間）であろう。

遠征隊の名前がそうであるように、この隊は最初ガネシュ・ヒマールを目標にして出かけたが、予定の接近路の一部が中国に譲渡（a été cédée）——これが実際上と

ういうことを意味するのか瞭らかでない）されていたのと、荷物の輸送に手間とれたのとで、ガネシュの方は遂に断念した。もう一つ他に接近出来る路はあつたが、これは一度も他の遠征隊が通つたことのない谷であるという。

そこで四人の登山家は、ホコ先をジュガル・ヒマールの処女峰 Dofe Lakpa (6,988 m) に向け、B C (4,000 m) から上に順次キャンプを進めてつた。C1 (4,750 m), C2 (5,650 m), C3 (5,950 m)。

然しながら悪天候とドルジェ西稜の意外の悪さに負け、何回もの攻撃も遂にその成果をみる事が出来なかった。

遠征隊は再度目標を変え、シェルパと共に処女峰 Gaugchen Po (6,400 m) を狙うことになった。そこでダルブレールとレイは五一五〇mのCから頂上アタックに向つたが、これも頂下一五〇mで敗退、ジルーは五七〇〇mにCをつくつたが、時既におそく、隊は廻れ右をしなければならなくなつた。

結論としては、もしもう少し時間之余裕があり、天候に恵まれたならば、この二峰は登れたであろう。来年の捲土重来を期している彼等に、心からその成功を祈つてやまない。

(Michel Vaucher, "Die Alpen", August, 1964, 吉沢一郎記)

(シッキム・ヒマラヤ)
タールン峰 (7349 m)
初登頂

ドイツ・ヒマラヤ遠征隊（一九六四年）は Richard Hechel 博士（近年米国在住の筆）を隊長にしてカンチエンジュンガ山塊の Talung Peak に向つたが、五月十九日午後一時、隊員の Franz Lindner と Tensing（シェルパ・名不明）の二名が頂上に立つた。

最初 Simbua-khola をのぼる近道が通れないことがわかつたことと、Mirgin La (4,500 m) に雪崩の危険があつたので、遠廻りではあつたが、Char-Chu 谷から La-psong La (5,300 m) を越えて Yalung 谷へ入つた。この山越えは可なりな大仕事になった。

チャール・チュ谷のダラン・バザールを四月五日に出てヤールン氷河の西側にまずキャンプ・ラプソンを設けたのが四月二十四日、次に B C はその上の四六〇〇mに建設、高所キャンプは C1 (5,100 m), C2 (5,600 m), C3 (6,200 m), C4 (6,750 m)。

五月十三日に行われた最初の頂上攻撃は猛烈な吹雪で失敗。成功したのは前記の通りで、午後の降雪の始まる寸前であつた。その間第二の攻撃隊として出発した隊長と Mardike は、吹雪のため午後三時、七二二五mの地点から退却しなければならなかつた。

タールン峰の偵察と攻撃についての概略は「山と溪谷」（三九年六月号）の John W. Tucker の「カンチエンジュンガ」を紹介する時に書いておいた通り、一九五四年にタッカー隊が殆んど成功するところまで登つてゐる。日本のシャブルー隊が頂下一五〇mまで登つたといふことを聞いたが、ネパール政府の許可を得た上でのものであつたならば幸いである。

尚、マルセル・クルツ著、クロニク・ヒマラヤヌの対三九八頁に美事な写真と部分地図（一〇万）がある。又、タールンはチャンドラ・ダスの書によれば「馬の谷」ということ。このタールは「Te ga」となると「鞍」の意味（イエーシケによる）になるから、ナムチェ・バザールの近くにある Kang Toga は「鞍の氷峰」ということになる。これは写真をみても旨い名前だと思ふ。

（「Die Alpen', 64/8 号を参照、吉沢一郎記）

アンナプルナ南峰
初登頂

樋口明生隊長以下六名よりなる京都大学山岳部の遠征隊は南アンナプルナ氷河より、アンナプルナ南峰（別名ガネシュ）を目指していたが、十月十五日、その初登頂に成功した。

一行は九月十七日南アンナプルナ氷河の聖域にベースキャンプを設営した後、氷河の源頭にあるセラック屋根となすけた尾根にルートをとって、十月三日 C III（五、四〇〇m）、十月五日 C IV（六、〇〇〇m）、十月十日 C V（六、四六〇m）を夫々設営した後、十月十三日アンナプルナ南峰（南峰は最南峰、中南峰、北峰の三峰からなり最南峰が最も高く七、二五六m、中央峰はそれより一〇〇m位低く北峰は最南峰よりやや低い）の中央峰にまず、吉野照道、木村雅昭上田豊の三隊員が登頂し、十五日には上尾庄一郎副隊長とシェルパのミンマが、中央峰を越えて最南峰の登頂に成功した。同日、樋口隊長とシェルパのカルマは北峰に向つたが、この隊は難路のため途中で引き返したが、現役山岳部員を主体とする同隊の成功は高く評価されている。（松田雄一）

ヒラリー隊の活動

エドムンド・ヒラリーの遠征隊が十一月三日にエヴェレスト近傍のタムセルク（二一、七三〇フィート）に初登頂したと、ヒラリー氏自身から英紙ガーディアンに報ぜられた。その報導によると頂上攻撃は副隊長のジム・ウィルソン（ニュージランド）の指揮で、ニュージランド人三名、英人一名の登頂隊員が頂上に達した由。なお登攀は非常に困難で、固定縄四

〇〇〇呎、網ぼしこ一〇〇呎を必要としたという。

このヒラリー隊は Himalayan

Schoolhouse Expedition という

妙な名前をつけている。これは、

この遠征隊の目的の一つがヒマラ

ヤのシェルパたちの居住地域に小

学校を建設することにあるため

で、シカゴの教育財団の資金援助

を得て遂行中である。すでに一九

六〇——六一年の遠征でシェルパ

たちの居住地域の中心にあたる

Klumjung に最初の小学校を建設

したが、それが評判となつて一九

六三年には標高四〇〇〇米もある

Pangboche とチベット国境まで二

〇キロ足らずの Thami にも小学

校を作った。そして一九六四年に

は Junbesi, Chaunrikarka, Nam-

che Bazar の三ヶ所に建設したと

いう。なにしろカトマンズから十

五日間も要するので資材運搬は大

仕事であつたらしい。

さらに、この遠征隊は Lukla

STOL 機用の滑走路を建設するこ

うが大仕事に従事した。これが完

成するとキャラバンの日数も減ら

せるし、資材運搬にも便利とな

る。将来は観光用にも使われるよ

うになるだろう。

ヒラリー氏がこのような仕事に

打込んでいるのは、数次の遠征に

献身的な働きを示してくれたシェ

ルパたちへの報恩の気持ちからだ

ということをガーディアン紙への寄

稿で明らかにしている。(T.S.)

スペイン高峯初登攀表

Pyrenees

5) Monte Perdido	3353(11001)	1802	Fr	Rondo, Laurens
		1880	Sp	Ramon Arabia
11) Casco de Marboré	3006(9862)	1932	Fr	Henry le Breton, Jacques Lécclere, Jean Arlaud
12) Torre de Goriz	2787(9144)	1892	Fr	Henry, Brulle and Celestian Passet
7) Cilindro de Marboré	3327(10915)	1864	Fr	Henry Russel
9) Vignemale (Pique Longue, Grand Vignemale)	3298(10820)	1838	Br	Lady Lister and her girl friend with 2 French guides (Cazeaus, Charles)
10) Petit Vignemale	3032(9948)	1890	Fr	Henri Brulle and French guides, Celestian Passet, Salles
8) Pico de la Maradeta	3308(10853)	1817	Fr	Frederic Parrot, Pierre Barrau
		1902	Sp	Ramiro Busquets, José Sayo, Jose Mir
6) Pico Maldito	3350(10991)	1905	Fr	Le Bonidier, J.M. Sansuc, Cambué, B. Luquet
		1910	Sp	Emilio Jucandella, J. Haurillon
4) Aneto	3404(11168)	1842	Fr	Earl Albert de Franqueville, (Russ) Platon de Tchihatheff, (French guides) Jean Argarot, Pierre Redonnet, Bernard Ursule, Sanio
		1855	Sp	Juan and Francisco Manuel, Michot (guide)
Gredos Sierra-Central Chain-				
15) Pico de Almanzor	2592(8504)	1899	Sp	Manuel de Amezua, Jose Ibran
Picos de Europa-Central Chain-				
13) Torre Cerrero	2642(8668)	1892	Fr	Earl Saint Saud
16) Naranjo de Bulness	2517(8258)	1904	Sp	Pedro Pidal, Gregorio Pérez
Western Chain				
14) Peña Santa de Castilla	2596(8517)	1892	Fr	Labrousche, guides Bernat-Salles (Fr), Vicenton Marcos (Sp)
Sierra Nevada				
2) Pico Mulhacen	3481(11421)	1754	Sp	Antonio Ponz
3) Pico Veleta	3428(11247)	1754	Sp	Antonio Ponz
Canary Islands-Santa Cruz de Tenerife				
1) Volcano Teide	3707(12162)	1582	Sp	Names unknown
Grand Canary Isle-Las Palmas				
Roque Nublo	1862(6109)	1932	D	Jorge W. Schmit, Hermann Ranschert, Juan Langenbach
(This is a monolith 70 m high and needs to use artificial techniques)				
		1946	Sp	Emilio Feito and other 5 climbers

スペインの高峯の 初登攀表に就いて

吉沢 一郎

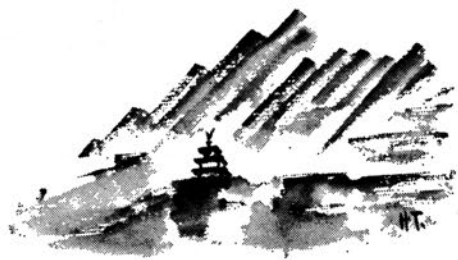
私達が一九六一年にアンデスへ行つた時、同じくアンデスを目指して来たスペイン隊の隊長フエリックス・メンデス氏(スペイン山岳連盟会長)から過日私の依頼に応じて彼の国における高峯の初登攀表を送つてくれた。可なりな努力だったと思うが、その親切が身にしみる。

山名の左にある数字は高さの順を示しているが、最高峰が大西洋上のカナリー群島にあるのは面白い。

メンデス氏はビレネーの主な山の登山用地図を沢山送ってくれたが、こういう類いのものは日本の方が発達しているようだ。私は御礼に二〇万や五万の地図を沢山送ってあげた。礼状がつい先だつてついでに「山日記」に再録されることを希望する。

本号目次

・カイザー元帥の印象……………	三
・M・エルツェグ氏の来日……………	一
・ローツェ・シヤール計画競合についての顔末報告……………	四
・39年度外貨枠申請の経過……………	五
・海外だより……………	六
・図書紹介……………	八
・会員通信……………	五
・羅白岳登山……………	四
・支部長会議……………	一
・ニマ・ノルブさんの滞日記……………	一
・有志閑談会……………	四



辰沼広吉画

図書紹介

「スイス人と山」

「赤いピーク」

今井雄二

アーノルド・ランの新著について紹介を書くことを、この春ごろ編集者とお約束しながら、雑事に追われて今日まで約を果たすことができなかった。後れてしまつて申し訳ないが、その後読んだもう一冊を加えて、せめて責を果たさせていたくことにしたい。難解なものでお恥かしいが許していただければ幸いである。(十月二十五日)

「スイス人と山」はアーノルド・ランがスイス山岳会創立百周年(一九六三年)を記念して書いた本である。ランは幼少のころから

父に連れられてスイスに親しみ、一生を通じてアルプスの登山とスキーをつづけて今日に至っていることは周知の通りで、彼の経歴とスイスへの深い理解に対してスイスのアルプス研究財団が支援してこの本が出版されたようである。この本はスイス山岳会史でもなければ、登山史でもない。彼がサブタイトルで断っているように、「山が人に及ぼした影響の研究」がテーマであつて、山岳がスイス人の生活に、思想に、政治に、美術にどんな影響となつて現われているかを追求している。

ランはスイスの民主主義と独立精神は昔から山民によって支えられていることを指摘している。外国からゆすぶられて動揺し勝ちな平地民を危機から救つてきたのは、いつも不屈な山民であつた。スイスは一時外国領土の支配下にあつたこともあるけれども、自らは封建時代をもつたことはなく、ウィリアム・テルの伝説が語るように生え抜きの自由平等と独立精神の保持者であつた。彼らのデモクラシーは他の近代国家が自らの封建制度を破つて勝ちとつたものとは違つて、彼らが生来もつてい

るものである。この生え抜きの自由平等の精神がスイスの独立を支えてきたのである。この不屈な自由独立精神の一挿話としてランは一九三六年、第二次大戦前の国際空気が緊張した中で行われた冬期オリンピック大会の開場式の光景について書いてい

る。そのとき各国選手はみなナチ方式の手を前へ差し出しヒトラーの方へ顔を向ける敬礼を行つて進んだが、スイス選手だけは、オリンピック方式を守つて手を横へ差しのべ、前方を向いたままで入場式を行つた。このとき壇上のヒトラーが不快な表情を示したので、ランは一朝戦争が始まつたらスイスはヒトラーの侵略を蒙るのではないかと冷や冷やしたそうである。

スイス人の山岳愛がいかに古くからあつたかは、十六世紀にストックホルムに登つたベルヌのマルティン・ホルンが山上の石にギリシャ語で「山岳愛は至善」という文字が刻まれているのを発見したということでもわかる。ランは諸外国が山岳に対して無関心であつた時代にアルプスの登攀に熱意を示したミュラー、ゲスナー、マルティン・シムラー、ジョイヒツア、グルンナーなどの先駆者について語り、アルプス思想の父としてハラール・その後継者としてのルソーを論じている。次いでド・ソシュールや氷河研究のアガシツ、その他の初期登山家から始まる、過去百年間のおもな登山活動を述べている。それと同時に、十九世紀の黄金時代以来殺到してきた英国その他の外国登山家たちが、スイスのガイドたちと与えた影響やガイド気質なども語っている。

そのほかランはこの本で *Swiss Klimatists* と呼ばれる十八世紀の優れた小品画家たちについて

一章を設けているが、彼らの作品が二十四葉の挿画としてこの本を飾っている。どれも見ていて飽きることなく楽しいが、中でも六葉の銅版画、二葉の油絵の原色版などは超モダンな夢があつてうれいものである。

The Swiss and Their Mountains. A Study of the Influence of Mountains on Man. By Sir A. Lunn. Demy 8vo, 167 pages, with plates 8 in color, 16 in black and white. George Allen & Unwin, London, 1963. 25s.

*

「赤いピーク」は一九六二年に行われた英ソ合同登山隊のパミール遠征記で、隊長代理のマルコム・スレッサの個人著作である。もともこの計画は一九六〇年にスコットランド山岳会のケネス・ブライアンとこのスレッサとの間に話が生まれ、ジョン・ハントの賛同を得て、英国山岳会・スコットランド山岳会が共同でソ連登山連盟との交渉が始まつた。その結果一九六一年に遠征が決定したのだが、この本ではまず計画の動機、発端から英ソ折衝の経緯がくわしく書かれている。

英国はハントを隊長に十名の隊員を送ることになつて、一九六三年七月モスクワに到着、そしてソ連最高の共産峰(Pik Kommunist. zma 7495 m)を目指すことになつた。この共産峰は前にスターリン峰と呼ばれていたが、スターリンの扶殺によつて山名が変更されたもので、一九五六年すでにソ連隊

によつて初登頂が行われている。英ソ合同隊の基地はガルモ氷河の末端に近いアヴウダラ(頂上との標高差約四五〇〇m、距離二五マイル)に設けられたが、この近くまで隊員も荷物もヘリコプターで運ばれ、ポーターは使用されなかった。英国隊はこの基地から見える共産峰のほかに前衛の山、愛国峰(約六六〇〇m)と、ガルモ(六八七八m)の共和峰の雄姿に魅せられて、この二峰にも登ることにして、登山隊は三つに分かれた。

ところがこの共和峰へ登つたウィルフリッド・ノイスとロビン・スミスの二人が遭難死したという悲報が主峰隊のキャンプへ伝えられてきた。この不慮の事故で登攀を中止すべきかどうか協議されたが、結局続行することに決まつた。ハント隊長ほか二名だけが報告のため急ぎ帰国していった。

共産峰の登攀は英ソ各四名ずつで行われた。上部の南面標高差約一三〇〇mの壁が予期以上に悪く、そこで死闘を繰り返したがCⅦ(約七〇〇〇m)を最後に、八月十一日全員登頂に成功した。その間の詳細はここに紹介する余裕はないが、私がこの遠征記で特に関心をもつた点が二つある。一つはこうした国際合同登山という形態が現実どんな模様であつたかということ、もう一つはノイスらの遭難の詳細な情報を知ることである。まず国際合同登山のもつ複雑性

はどれも同じようなものであろうけれど、この英ソの場合は特にひどかったようである。資本主義国の登山精神と共産主義国のそれとは、すでにイデオロギーの上で大きな断層があった。両者の間で登山とスポーツについて、キャンプの中で論争が展開されて興味深いものがある。さらに装備について、食料について、登攀の技術的な面や行動において、両者はそれぞれ独自のものをもち、そのために彼らは別々の行動をとって登攀を進めていった。この間の複雑微妙な点をスレッサはかなり思い切った卒直に書いている。

次にノイスとスミスの遭難であるが、これはガルモの共和峰の登攀中に起ったもので、二人は組んで登頂、下山の途中スリップして四千フィートの氷壁を落ちたのだった。折柄登攀中の他の二人がこれを目撃し、下方にいたハントの組に知らせた。ハントらがそこまで登りついでみると二人は氷壁にある五〇メートルばかりの棚にザイルで結ばれたまま並んで死んでいるのが確認された。その場所には搬出不可能な場所だったから、そのままそのクレバスの中へ永遠に葬られることになった。

目撃した他の組の話では、ノイスとスミスは深雪のある氷のリップをアンザイレインして同時行動で下っていた。どちらかがスリップして他を引きずったものと思われるが、どちらがスリップしたかは不明だといった。ハントは悲報を

本隊に知らせると、急いでヘリコプターを呼びよせて他の二人と帰国していった。

エヴェレストなどで最も親密な間柄であったノイスの死はハントにとって非常なショックであったらしい。ハントばかりではない。ノイスのような優秀なクライマーであり、その卓越した文筆で親しまれた彼を失ったことは、世界の登山界に大きな失望を与えたに違いない。私なども特に哀惜を感じるものの一人である。

Red Peak. A personal account of the British-Soviet Pamir Expedition 1962. By Malcolm Stesser. Demy 8vo, 256 pages, with color plates 4 and photos 16 pages. Hodder & Stoughton, London, 1964. 30 s.

日本山岳会学生部年報

No. 1—1963

戦後関東岳連が再発足したのは昭和22年であるが、これが主体となって24年に現在の日本山岳会が誕生した。このことは巻頭の「学生部の歴史」(山崎安治)に述べられている。今回はじめてその学生部年報第一号が出たわけである。内容は「過去五ヶ年間の積習期」の記録、ほか研究に「昼食の主食に関する研究」(農大)、凍傷(その予防と処置)慈恵大、その他報告、規約、遭難対策基金定款などがある。また巻末付録に「慶応山岳部とOBのつながり」(研究講演要旨、塚越OB)があるが、遭難後の部活動について多くの反省と苦言とが述べられていて一読に値する。

なお編集、装丁ともに清新でよい。八二頁、一九六四年十月三十一日発行、編集発行者、青学大中川武(F)

No. received	Author	Title
10441	Kenneth Mason	Abode of Snow
2	W.M. Conway	Climbing and Exploration in the Karakoram Himalaya
3	Frits Bechtold	Nanga Parbat Adventure
4	John Hunt	Our Everest Adventure
5	Fosco Maraini	Secret Tibet
6	Maurice Herzog	Annapurna
7	Charles Evans	Kangchenjunga. the Untrodden Peak
8	F.S. Smyth	The Kangchenjunga Adventure
9	Clydesdal & others	The Pirot's Book of Everest
10450	P.E.M. Fellows & others	First over Everest
1	W.H. Murray	The Story of Everest, 1921-52
2	J.R. Ullman	Man of Everest
3	H.W. Tilman	Mount Everest, 1938
4	Ralph Barker	The Last Brue Mountain
5	Bernard Pierre	A Mountain Called Nun Kun
6	Paul Bauer	Himalayan Campaign, the Attack on Kangchenjunga
7	Paul Bauer	Kampf un dem Himalaya
8	Paul Bauer	Um den Kantsch
9	Lowel Thomas Jr.	Out of This World, across the Himalayas to Forbidden Tibet

No. received	Author	Title
10460	S.D. Ripley	Search for the Spiny Babbler
1	Joseph Hooker	Himalayan Journals, Notes of Naturalist
2	Philipp Borchers	Die Weisse Kordillere
2	H.W. Tilman	Snow on the Equator
4	H.W. Tilma	Mischief in Patagonia
5	C.G. Egler & others	Challenge of the Andes
6	M.A. Azéma	La Conquête du Fitts-Roy
7	Prince L.Amedeo	The Ascent of Mt. St. Elias
8	Hudson Stuck	The Ascent of Denali
9	B.W. Mitchell	Trail life in the Canadian Rockies
10470	J.M. Thrington	The Glittering Mountains of Canada
1	R.S. Monahan	Mount Washington Reoccu-pied
2	T.G. Brown	Mount Foraker
3	Robert Löel	Tirol
4	W.R. Irwin	Challenge, an Anthology of the Literature of the Mountaineering
5	J.R. Ullman	High Conquest, the Story of Mountaineering
6	L.H. Robbins	Mountain and Man
7	Luis Trewker	Brothers of the Snow
8	C.D. Abraham	Modern Mountaineering

昭和三十六年十一月、ハウストン一家が来日、本会有志でささやかな歓迎会を開催した折に(会報二一九号参照)、オスカーさんが本会へ所蔵書の寄贈を申し出られたが、帰国後約束通り左記リストの如く送付頂き、図書室を飾ること(折井健一・倉知敬)

会員通信

羅白岳登山

井手 貢 夫

榎さんや三田さんが網走市や斜里市の招きで来道した機会に、山開きにあたる七月五日に羅白岳に登山するという事で、北大山の会からも六人ほどが参加した。羅白岳の山開きには、知床を誰れよりも愛し、知床を世に紹介することを念願としつつ亡くなった木下弥三吉氏の記念碑のお祭りも例年行われるのだそうだが、今年は記念碑が出来てから五周年にあたり、しかもこの年に知床が国立公園として誕生したことは、木下氏の霊にとって、榎、三田両氏の来道とあわせて、まことに慰め多いことであらう。参加者は、地元ウトロ山岳会主催のものに、網走山岳会のメンバーも加わって、百人を越すほどの人数であった。その大多数が、岩尾別温泉の上手に移築された故木下氏の造材小屋に泊った。もちろん、その一切の世話は木下未亡人の行きとどいた指図によるものであった。

私は都合で、ウトロに前夜とまったので、当日朝、役場前五時半出発の臨時バスに乗りこんだ。若い人たちが、それに元氣な高校生も加わって、ウトロ山岳会長桂田氏の指揮のもとに出発。あいにく、羅白の頂きは笠雲がかかってい

る。

バスはウトロの町を出るとすぐ急坂を登る。二個の巨大な岩を防波堤のように海中にすえたウトロの町が背後に美しい箱庭風景となつて見下ろせる。

やがて海岸から岩尾川にそって山ぞいに登ると台地の上に出て、

海別岳、羅臼岳、硫黄岳、知床岳などの山々が見わたせる。羅臼岳はすぐ真近かにむくくりと掌をさし上げたように高々とそびえて、西南側は八百米ほどきり立ったようにけわしい。桂の大木など美しい樹林の中を行くと岩尾別の温泉に着く。その背後に木下さんのヒュッテがあって、丁度横さん三田さんを中心に朝食の最中だった。あいつをするといふ大変でしたね。夜行でしたか」と聞かれて閉口する。一昨日に網走について、横さんの宿も知っていたが一言のあいさつもせずに沙呂間湖へ遊びに行っていたのだ。もっとも、網走市の公式の賓客としての横さんを訪ねるのをわざと遠慮したのだ。

六時半頃、木下ヒュッテからちよつとあがった空地に、しめをわたしして、神主さんが山開きののりと一同お神酒で口をしめしついでいよ登山。桂田ウトロ山岳会から、高校生諸君に注意。横さんと登山することは皆さんのよい思い出になるだろう。銘々二つぐらいつ紙くず類を拾うこと、キャラメルやガムの包み紙を地面にすてないでポケットに入れて持ち帰ること

と、下山したら豚汁のご馳走が待っていることなど、聞いていてまことに気持ちよくほほえましい。高校生諸君、元気のよい人たちの先頭に、しんがりを横さんのグループ、三田さん、中野さん、木下夫人、小生、それに荷物持ちの北大OB諸君。

私ははじめて横さんのお供をするので、すぐあとについていたが、横さんの足取りのたしかで早いのは閉口した。オホーツク海の見わたせる所で一息つく、横さんは「悪いけれど、今日は欲ばってでるだけ登ろうと思ひますからお先きに」といって、とことこ行ってしまった。しばらく行くと流れのふちの空地で一同休んでいる。真中に横さんがどっかと腰を下ろして、あえぎあえぎ登って来た私を見ると早速ひやかしかゝる。「ビタミン注射でもしてあげましょうか、ずいぶん井手さんは息が荒いすな」へたにやせがまんなどする手はない。「それはもうぜひお願いしたいもんですなこちら息も絶えだえてすな」と負けるが勝ちで行く。木下夫人も元気で登ってこられる。

その次ぎの水場へくると、横さんは「私は失礼して食事になりますすこしづつちよくちよく食べるので」とおっしゃる。まだ八時半だが朝食前の私も早速べん当をひろげる。三田さんは悠々と煙草を吹かして、水筒の水も飲もうとしない。日陰にいと蚊がよって来てたまらないが、腕をまる出し

にして平気でいる人がいる。「あなたの皮膚は特別製ですなそれでも蚊が食いません」と横さんは口の方はちよつとも休まない。「あるていど食わしておくと平気になるものだ」と中野さんも相かわらず泰然自若である。

極楽平を通り抜けて高い所へ出ると、今通った白樺の樹林が大きな平らにひろがって、そのむこうにまた一段低い台地が見える。その台地がおそらく知床の断崖を造って海へ落ちるのだろう。海上にはもやがたちこめていられしく、雲と海との境が判然としなない。しかし頭上は幸いに晴れて、おだやかなよい日よりだ。

このあたり白い可愛い花が道ばに数多く咲いている。名を聞くとつばめおもとと教えられた。まことに、清そで美しい。反対側は斜面になって落ちこんで、そこを樹林が埋めているが、樹々の中に、こまかく白い花が集まっている。ななかまどの花と知っておどろいた。赤い実は秋の終りに印象的だが、こんな可愛い白い花とは知らなかった。やがて行手に雪渓が見えて、横さんたちは早くもそれを登っている。樹林帯が終って、だけかばや灌木の間に岩肌が露出し、そのあたりえそこざくらが赤味がかった紫色の可憐な花をかざし、その間にちんぐるまが白い花の群落を作っている。雪渓を登り切った岩石の上には、つがざくらが色濃く桃色に一面に咲いて、手前の白いわびげの花とともにび

っしりと岩を蔽っているのがいかにも美しい。

登り切ったところはひろい鞍部で、右手約三百米ほどに羅臼岳の頂上がそびえている。左手は二百米ほどの岩だ。この頂きの間の鞍部に木下さんの碑が、大きな岩石の真中にきざみこまれている。知床をこよなく愛した故人を偲んで横さんが書かれた碑文の前に、横さんその人を迎えて、一緒に元気に登ってこられた木下さんの奥さんもさだめて感慨の深いことである。

頂上ではゆっくり休んだ。微風が吹いて心地よく、眼下はるかに知床の山々を見はるかし、ウトロの港へ続く海岸線もくっきりと見える。国後島の方はいく雲に蔽われて、島の二つの山の頂きがわずかに頭を出しているだけだ。若い人たちが雪を運んできたので、ウイスキーのオンザロックとゆく、すっかりよい気持ちになって、動く気がしない。こんなおだやかな日ならここへ泊っても大丈夫だろう、とだれかがいう。「井手さんもそんなに気にいったらそこへ一晩寝ていなさい。あしたの朝死んでいったって、中野ドクターは見るにんか来やしないよ。下で酒でものみながら、空腹凍死と診断して早速検死書を書いてくれるよ」と横さんは相かわらず口が悪い。「ああいい気持ちだ、下りるのはいやだね」といっていたのは、しかし横さんである。中野ドクターはニヤニヤしながら、オンザロッ

クを口に含んで泰然としている。私はわずかのウイスキーにすっかり酔ってしまった、一番あとからふらりふらりとおりて行く。横さんたちみんなが美事にグリーセードをして下で待っている雪渓の上で、フラフラしながら尻もちをついたら、大声で、みんな何やらないで笑っている。尻もちをついたついでに雪を一つかみ握ってはおぼって、みんなのところへ行くとドサリとおお向けにねころんだ。中野さんが、「井手さん、みんなが何をいっていたか分かるか」というから、「そんなことは聞かなくなつたてわかる。」という大笑いになった。

朝六時半に出発して、頂上が午後一時、岩尾別に下りついたので午後四時。そんなにその記録ではない。殆んど千六百米近くを、七十三才の横さんをはじめ、三田さん、中野さんなど元気に一日で往復したわけである。ヒマラヤだ、って、こんなに大きく登り下りはないよ、と中野さんはいっていた。

楽しい山登りだった。翌日は雨になって船が出ないので、中野さんや若い人たちと、朝早くウトロを車で発った。終りに、いろいろお世話下さった木下夫人、ウトロ山岳会、網走山岳会の皆さんに厚くお礼を申し上げる。(三九、七)

船形山

村上金吾

仙台駅前から定義(じょうぎ)

行の終バスに乗り、定義についたときは日が暮れていた。仙山線白沢からも定義行のバスが出ていることを知らなかったのだ。——こ

こは有名な如く様のあるところ。それから三・二キロの山道を定義温泉まで泊った。

翌朝くもり。しかし天気予報はよいというし、ためらわず出発。温泉からのぼる道もあるが、一・二キロ戻って屋敷平から山道にはいる。登りは概ね緩やかで雑木林、紅葉はすこし早い。後白髪(うしろしらびげ)山の手前から霧雨、蛇ヶ岳を経て、そろそろ船形の頂上も近いと思うころ、升沢(ますざわ)から登って升沢にお

りという二人の男達に会った。頂上着は正午をすこし過ぎていた「宮城県立自然公園船形連峰」と書いた白塗の大標柱がでんと立っている。惜しいことに、風が強く霧雨をとばして展望はきかない。ただ霧の去来する間に、山形県側に落ち込んだ褐一色の谷間が目の下にときどき片鱗をのぞかせるだけ。

降路は同じ山形県側の観音寺の新田におりる道をとった。柳沢小屋の下でトラック道路に出て大平放牧地を通るが、道はなかなか遠い。間木野(まきのの)の奥で、草刈の女達が帰りの耕うん機に乗せてくれた。そして新田まであと十分くらいというところでおろしてくれた。姉妹でもあろうか、若い二人の親切がほんとうに

有難かった。

新田までくると、日が暮れた。

道端に「御所山登山口」の大標柱が立っている。船形山を山形県側では御所山という。東根か天童から登るにはここからになる。大石田、鶴子からはなお遠くなるので、定義温泉または升田の方が距離は近いわけだが、いずれにしても標高のわりに、随分アブローチに時間を要する山である。一時間近くたって楯岡行バスがきた。東根温泉におりて泊った。(昭和三十一年十月七日〜八日)

台湾親善の旅から
八幡製鉄所山岳部OB会
橋本三八

台湾親善の旅から

八幡製鉄所山岳部OB会
橋本三八

十一月三日に九重から八幡に帰り、四日八幡発大阪へ、五日大阪空港発、台北着で登山手続をして七日から山に向い、十日に秀姑巒山に登り、十一日北山泊り、十二日玉(山新高山)南山登頂、十三日阿里山に下ってきました。アブローチが長くて日数のかかる山です。巨きなご老体の山という印象日本の山のように汚されていないのも気持ちいいものでした。毎日雨でついにマボラス山を除かねばならなかったのは残念でした。帰りは高雄まで南下して今日台北に帰ったところです。余さんに同行していただきました。(十一月十五日、台北市YMCAにて)

会務報告



辰沼広吉画

支部長会議

期日、十月十七日(土)午後二時
場所、本会、図書室

出席者

越後支部 藤島、斉藤
関西支部 水野、梶本
静岡支部 牧野、山本
山梨支部 三井
秋田支部 佐藤、佐々木
富山支部 須賀
東京支部 中田、石黒
東京支部 沼倉

各支部長並びに委員
松方会長、三田、渡辺副会長
深田、折井、山崎、金坂、川上、
松田、田村、辰沼、田辺、古沢、
日高、交野、神谷、望月、吉沢、
村井、入沢、松本、野口、以上三十四名

一、会長挨拶並びにエヴェレスト登山について
(a) ネパール政府には一九六六年度について、一応の内諾を得ている。

(b) 費用七千万円を予定。文部省、毎日新聞社、NHKに交渉中、

今回は対外一般募金は考えていないが、本会々員には積極的な援助を願う。

(c) 登山の準備、計画については、エヴェレスト委員会を中心に研究を進めている。

二、海外登山事情につき意見交換最近外務省を通じて、ネパール政府で登山を厳しく取締まる

とのこと。日本隊だけではなく各国の隊も同じ制限を受けることになる。今後は春、秋に一国から各一隊程度にしばらくは

ことが予想される。特に各支部単位で行う計画については連絡を早目に願う。

尚現在本会関係先からの海外登山計画は次の通りである。

一九六五年春
東京大学 カラコルム
静岡大学 チューレンヒマー

中央大学 カラコルム
一九六五年秋
東京大学 ランタンヒマール
千葉大学 チョーパヒマール

大阪大学 P29
同志社大 ペルーアンデス
東海支部 マカール

一九六六年春
越後支部 カンチエンジュン
ガ山塊(チャブク)

北海道大 ドウラギリI峰
一九六六年秋
東京工大 カンジロパヒマー

また、一九六五年春のネパール政府から許されたものは次の如し。
日本隊、早大ロウツエシヤール

京大カンチエンジュン

ガ
英国隊 トウラギリ
印度隊 エヴェレスト

西独隊 アンナプルナ等である
東海支部、富山支部、静岡支部、
越後支部より各地区にて計画中の
登山隊についてそれぞれ説明、活
発な意見があった。

三、本会創立六十周年記念につ

て
明年(一九六五年)は六十周年
に当るので、各支部からも実施
事業について提案を願う。

四、日本山岳協会について
協会が発足して六年になるがそ
の間種々情勢も変化して来た。
現在の運営は常任理事制として
話し合いの場も多く、協会運
営細則も立戻したい意見が出て
居る。

五、本会運営、連絡事項
(a) 会費、入会金の件
入会金の値上げについて考慮
(現在三千円)五千円へ壹万
円程度案があった。

(b) 会報編集の件
会報の編集は大体によく出来
ているが、特定の欄を設け、
各支部の紹介等をもり込みた
い。支部からの活発な寄稿を
期待する。

(c) 会員名簿の発行は早急にする
こと。

(d) 会員制度について準会員のな
ものを考慮したい。

(e) 新ルームについて報告
御茶の水よりの移転について
は保証金二百七十六万円、家

賃一ヶ月三万二千三百円、管理費五千二百五十円となり会の財政は苦しいので会費納入について協力願いたい。(納入状況は昨年同期より悪い) 移転実施については、特に牧野、松本、沼倉、青木氏並びに東京支部委員の協力により本会支出は十万円程度で済んだ。以上

十月理事・評議員会

一日・ルーム

△出席者
松方会長、三田、渡辺副会長、理事 深田、辰沼、折井、山崎、金坂、松田、木下、武藤、田村、古沢、評議員 日高、藤島、神谷、加藤、織内、入沢、吉沢、望月、藤井、村井

△議事と報告

①山岳五十九年(一九六四年)発行につき内容説明あり、明年三月刊行予定につき広告についても協力願いたい。

②エヴェレスト登山準備状況

1 文部省に対し補助金を申請した
2 一般募金については目下考慮せず、毎日新聞社、NHKに対し協力を交渉中。

3 本会内における募金は別途考慮する。

4 使用外貨については他の登山隊を圧迫しないように別枠獲得を考える。

③早大・東海支部ローツェンシャル登山競合について

1 海外登山審議委員に付託された審議答申(東海支部案の推薦を不

適当と判断したが当東海支部が他の山に目標を変更する場合には本会として出来る限りの援助を希望する)に基き会長に東海支部長と話し合いをしていただいたが、あらためて同支部よりポスト時代に変更の意向の申入れがあったので、昭和四十年年度行事として海外登山審議会で取上げてもらうことにした。

2 今回の競合問題については本会の周知が徹底していなかった点に鑑み今後慎重を期すること。

3 外務省よりの情報によれば目下ネパールに登山申請中のもの京大早大、富山岳連、エーデルワイス浅野学園の五隊については在印大使よりネパール政府へ許可されるよう申入れたとのこと。

④本会創立六十周年事業について
明一九六五年は本会創立(一九〇五)六十周年に当るので委員を選出し企画をすること。

⑤日印合同登山計画について
昨年三田副会長渡印の節インド側より婦人登山の提案あり、具体化の段階ではないがガルワル地域を目標として杉浦耀子会員に依頼して研究中、印度側と連絡している。

⑥石川県山岳協会設立について
石川支部、石川岳連により協会が設立された。

東京支部報告

九月十五日(火)臨時役員会
富士山に於ける氷雪技術講習会の件につき支部指導委員より説明、

諸般の事情により今回は中止に決定。

出席者

石原、沼倉、関口、小味、小野、片桐、芳野、君島、鈴木邦、倉知、山口、富田 十二名

十月七日(水)役員会

一、第三水例会の件
学習院アラスカローガン峰遠征報告

二、スキースクールの件

四十一年一月十五日と十七日二泊三日、山田温泉スキー場、八十名募集、四二〇〇円 会員外四五〇〇円

三、ヨーデルの夕べ報告

四、山岳五十九年の広告募集
出席者 折井、安彦、芳野、小味、野萩、沼倉、中、関口、富田 九名

十一月四日(水)役員会
一、第三水例会の件
山の季節について
気象庁 村越 望氏

二、東洋羽毛製品販売輪旋の件
三、東京支部で海外登山研究会を作る件
四、報告

十月三水会出席者二十九名東京支部婦人部で遠征計画をしている。

スキースクールの中間報告

出席者

沼倉、西丸、芳野、関口、小味、鈴木伊、倉知、富田 八名
以上

婦人部報告

十月六日

雪崩について 金坂 一郎氏
報告事項 出席者 十九名

報告事項

1 十月十七日と十八日懇親山行で上州武尊に行きました。生憎の雨で山には登れず宝川温泉に浸って紅葉を愛でて来ました。

参加者

2 世界の山岳についての研究グループを作ります。興味のある方は芳野さんまで御連絡を。

新ルーム披露パーティ

報告

八月十九日午後六時より新ルームにて開催、松方会長あいさつ、折井理事の経過報告。日高、三田、神谷、津田、末松、牧野の諸氏の祝辞があつて、九時すぎ閉会した。(坂倉登喜子)

出席者 佐藤久一朗、安彦六郎、堀川英司郎、下田 澄、鈴木泰一郎、皆川孝平、今井雄二、水野祥太郎、吉田薫、村井米子、宇田川久太郎、細川雅弘、大森藤政、鈴木英一、武藤晃、山崎安治、栗林一路、阿達 憲、伊藤博夫、齊藤健治、池田光二、中岡本丈夫、山口国俊、竹内義夫、川崎精雄、折井健一、菱川洋子、平山武志、柴田晴彦、西村久志、川泉 毅、鎌内章、石原達夫、美坂哲男、岡本龍行、広大山の会山本正隆、神谷 恭、朝井一男、浜田一馬、勝田房治、浜岡 透、末松大助、杉山 孝、鈴木 昭、小堤達雄、樋口一男、牧野 衡、黛 卓郎、長谷真澄、境野俊男、北野一彦、長谷部昭久、今井嘉道、吉沢一郎、早川義郎、高遠 宏、松永敏郎、網倉志朗、大野真一、井上公利、村井田博、村山雅美、木下是雄、野口末延、名須川浩増田洋子、池元善秋、日高信六郎、鈴木

越後支部・長岡ハイキングクラブ

紅葉の銀山探勝

十月十日午前十一時小出駅着急行にて日高氏(新津より)、神谷野口、村井、古沢、鈴木の諸氏来る。直ちに伝之助小屋の佐藤君、小出の伊倉君、永井、電発の大桃君が車にて銀山平の伝之助小屋に向う。古沢氏、奥津の二人は新潟より藤島氏、倉島君、室賀、土田とともに午前一時十五分発のバスにて伝之助小屋へ、遅れて夜翌月(三条)、清野の二人が来る。その後柳沢、三井の両君も深夜になって集まる。

夕食時には小屋のご好意によりイワナ、ナメコ、名物の山菜料理

木和信、松本吉正、深田久弥、高木菊三郎、油谷次康、大木英樹、中川清浩、友野正雄、小味秀純、隈部恵子、宮崎 紘一、遠藤隆一、安間 莊、須田紀子、瀬名貞利、深堀鉄男、徳木登喜雄、藤森元夫、佐藤佳年、島田 興、沼倉寛二郎、小原勝郎、辰沼広吉、加藤泰安、三田幸夫、浅井秩夫、島 秀夫、荻野和夫、菊地文雄、中里 巖、宮原 巍、田口三郎助、錦織保清、藤井正嗣、利根川信、福井正吉、米田 茂、竹田寛次、古沢 肇、北博正、片野多喜子、中司文夫、小松雅美、小松山隆夫、川俣俊一、川喜田二郎、三上正治、納見明徳、芳野超夫、芳野菊子、坂下心一、奥川雪江、中川 武、細川沙多子、広谷光一郎、杉浦耀子、林 欣子、ニマ・ノルブ、山口節子、岡部浩子、篠原進、加藤元一、田村扇一、松田雄一、富田美知子、以上一三四名(願不同来会順)

に舌鼓を打ち、歓談した。

翌十一日は雨も上り、雲一つない好晴で、五時四十五分出発、荒沢岳へ向う。一〇九〇米三角点朝食、前山へ、途中その日に帰らなければならぬ野口氏ら五名が頂上に先行、十一時四十五分頂上着頂上付近は前日の雨で九合目あたりから新雪があり、紅葉と新雪の織りなす秋の山の美しさを満喫する。

頂上組以外のものは前山の上で大休止、周囲の展望を欲しいままにする。伝之助小屋帰着午後四時十五分、六時小出駅着解散。

(奥津五郎記)

参加者氏名。

(東京) 日高信六郎、神谷 恭、野口末延、村井米子、中村 謙、川崎精雄、古沢 肇、会員外沖田虎吉、鈴木両氏(越後支部) 藤島 玄、倉島正吉、伊倉剛三、望月力、(越後支部) 長岡ハイクン(クラブ) 奥津五郎、室賀輝男、柳沢一男、清野正二、三井秀夫、土田幸雄、永井雅子、(直江津山岳会) 片田温一、内藤修ほか八名、(奥只見山岳会) 佐藤広文、大桃文夫ほか三名、以上JAC十八名、一般十七名

石川支部

岩間懇親会の記

晩秋の十一月七日支部恒例の懇親会を今年も白山岩間の奥津ヒュッテで開催する。正午過ぎ白山下行の電車に乗る。車窓から見る沿線の山並は赤や黄に染まり、収穫を終えた加賀平野は一きわ広々と見渡される。白山に源を発する手取川が加賀平野に開く扇状地帯のかために当る鶴来町を通過して、

白山を神体山とする加賀一ノ宮白山比咩神社本宮の鎮座地の加賀一ノ宮駅から電車は山懐りに入る。前方新雪の白山連峰も望まれてやがて終点白山下駅着。ここから岩間温泉行のマイクロバスに乗り換える。尾添川に沿う山裾の紅葉はさながら錦繡を織りなしたかの如く目を楽しませる。目付谷の橋を渡ればやがて尾添部落である。ここは中宮、岩間の白山登山道が出来るまで加賀からの登山口として賑わったが、今は尾添登山道は廃道となつていたので登山者は素通りする。このあたりの紅葉は今最高潮である。バスは中宮岩間温泉の分岐点を右に山腹に切り開かれた岩間道を行く。この分岐点には白山国立公園と立派な名標が出て来る。行くほどに眼下に中宮道が婉々と続き程なく中ノ川、丸石川、蛇谷川の合流点三俣が見えて来た。バスは丸石川を渡って間もなく岩間温泉に着く。金沢から二時間半。ここから徒歩で中ノ川左岸の七〇度以上の断崖につけられた水平道路を行く。年々の雪崩による欠壊がはなはだしいが紅葉の渓谷美を嘆賞しながらのコースは山旅に懐かしい道である。約一時間て山峡の岩間元湯のヒュッテに着いた頃は秋の日もだいぶ傾きかけて来た。今日は降ったたり晴れたり空模様で寒さは覚えたので早速中ノ川の支流湯ノ谷の川原の露天風呂で身体を暖める。この岩間ヒュッテは風呂場つきで然も湯ノ谷の川底に湧出する温泉を引き入れてある自慢の豪華な山小屋

である。一行十二名磯野支部長は社務で多忙で旅行中と聞き残念だったが池田前支部長が福井県勝山から遙々の御参加、河本長老のお顔も見え、湯上りの心地よさに宴に入る。今日の肴はすばらしくでかい揚げたての鶏肉に加えて木村氏の料理になる佳肴は調理士はだしの腕前に感心するやら歓談ははずんで山の夜は更けて行った。

窓明りから夜明けの近づく頃一人二人寝袋からは出して川原に出て行く。イワナ釣りである。待つ程に数尾のイワナを下げての帰来、さすが清流部員を任ずる面々だけあると歓声をあげて朝の食膳を賑わすこととなる。一方山の幸のなめく、沢がに、山ふきのとうの美味までも集められた。外は雪がちらついていて。一夜にして四囲の峰々の樹々は霧氷ならぬ雪が降りかかって美しい眺めであるが一人の寒さである。頭に雪片をのせて露天風呂につかるのも一興であった。

そろそろ下山の支度をする頃、日曜ハイカーが三人、五人と登って来る。ここから湯ノ谷右岸山腹につけられた小径を山越して三〇分も行けば中ノ川の左岸に出る。対岸のササ原を見下して一気は一〇〇米の高度差を中ノ川の川底に下りきると、特別天然記念物の噴泉塔群があるので、その探勝者と交替してヒュッテを後にする。今日は秋晴れて対岸の紅葉も一入映えている。誰云うとなく又来年と山を下りて行く。(亀田与三次記)

▽梓会だより

茶谷 東海

去る八月三十日(日) 清澄庭園で第三回総会を開いた。出席者は田部名誉会長を始め日本山岳会より二名、防大山岳部より十一名、防大ワンダーフォーゲル部より一名、海軍兵学校出身四名、海軍経理学校出身十三名、計三十二名の多彩である。正午庭園観賞の後午食に移る。

都内とは思われぬ閑静な美しい景観の中でたっぷり二時間をかけて大正初期の梓会創立時代の話から防大學生の先日の合宿談まで五十年の山の話に花が咲く。席上のビッグニュースは昨年三月雲取山の雲取山荘近くに田部重治先生のレリフが建設されたことである。なお、田部先生の講演要旨および談話参考事項次の通り。

○日本の山は文学、歴史など民謡にいたるまで一切を含めて楽しんで登るべきもので恰も日本酒をなめて味わうのと同じである。唯高い山に登ることを目指したり、危険な岩登りに力を入れたりするのはウイスキーをグッとあおるのにひたしい。梓会設立の気持は山に登って日本の国土を知ることにあることを一度思い起してほしい。

(田部重治) ○先日乗鞍の麓の平湯での国立公園大会に参加したが地元の有力量者が来年中には飛騨側から西穂高を越えて上高地へロープウェイを乗入れると明言していた。(これは自然を愛すると言う同会の主張と

矛盾しないか。(茶谷東海)

○終戦後スキー仲間と山彦会を作り中級の冬山を楽しんでいる。

(服部保正) ○梓会の名称は山田寿吉君が上高地の梓川に因んで命名したものである。(堤 恭二)

○防大山岳部の冬夏合宿訓練状況をハミリに撮ってあるからいつでも提供する。(朝井一男)

○松本連隊に勤務しているから北アルプス登山の方々のお役に立つことができると思う。(村田光昭)

▽お月見とヨーデルを聞く会

毎年夏の一夕を会員今井嘉道氏のお庭で催して参りましたが、今年はルームの移転などの関係でおくれ、去る九月十五日(土) 六時より仲秋の名月を眺めて、今井氏ご秘蔵のヨーデルを聞かせていただくことになりました。

当夜は生憎の空模様となり、名月は見られませんでした。新しいヨーデルを聞かせていただき、ご馳走を沢山ご用意下さって歓待していただきました。いつもながら今井さんご一家総動員でこの催しをご設置下さるので恐縮している次第ですが、こういう催しには会員の皆様が多数お誘い合せご出席下さるようお願いいたします。(東京支部、坂倉登喜子) 出席者 石原憲治、諸岡一、山下一夫、安彦六郎、石原達夫、須田紀子、坂倉登喜子、若村松枝ほか四名

ニマ・ノルブ さんの滞日記

一九六一年、ネパール、ヒマラヤ、ランタン・リルンで、大阪市立大学遠征隊、森本嘉一隊長、大島健司隊員らとともに帰らぬ人となった故ガルトゥン・ノルブの生前の言葉に「長男を日本で学ばせたい」という願いがありました。それから三年、同大山岳会から再び遠征隊を送り出すにあたって、彼の願いが入れられ、遺児の日本招待が計画されました。日本の岳人と親交の深いガルトゥンの長女、ニマ・ノルブさんの来日が実現したのは、このようないきさつによるものです。

ニマさんが、シエルバ特有の、人なつこい笑顔で大阪空港に降り立ったのは、八月十三日のむし暑い深夜のことでした。それから以後、短い期間ではありましたが、山の人の暖かい心遣いのおかげで、日本の生活を思う存分満喫し、九月十三日「私は日本が大好きで、いつまでもいたい。けれど父親の眠っているヒマラヤへ帰らなければなりません」と云い残して、インドへ戻って行きました。

以下、在日中の彼女の足取りを披露し、色々とお世話下さった山岳会、並びに関係各位の善意に、彼女に代って感謝するとともに、報告申し上げる次第です。

八月十三日、午後十一時四十五分、大阪国際空港に到着。淡いグリーンの特等車の衣裳をまとったニマさんは、旅の疲れも見せず、出迎える人々と四年ぶりの再会を喜び合った。

八月十四日、午前、大阪市立大学訪問、学長と挨拶を交す。午後、松下電器工場を見学。夜は、関西の岳人四十名が集り歓迎会が開かれた。故森本

大島両氏の遺族も出席、共に手を握り合って亡父をしのんだ。

八月十五日、同志社大山岳会のお世話で、京都見物。

八月十六日、デオ・チバ、隊員、市大山岳会々員らと奈良見物。昭和三十一年秋、ガルトゥン氏が来日したとき撞いたという東大寺の鐘の話を聞かされ一寸、しみり。夜は宝塚の花火大会を見物し、日本情緒を味わう。

八月十七日、宝塚観劇。

八月十九日、午後一時ハットにて東京へ。東京駅ではデオ・チバ、隊員、勤務先の旭ガラス関係者等に迎えられた。丁度、山岳会新ルームで開かれていたJ・A・Cのビヤ・パーティーに立ち寄り、集った人達に歓迎された。



八月二十日、旭ガラスへ挨拶、工場見学、会社関係の歓迎会。

八月二十一日、カメラ工場・化粧品工場を見学、ボーリングも試みた。

八月二十二日、夜、デオ・チバ隊の歓迎会が開かれた。懐しい友人に会えた嬉しさと、最初にして最後であった父親とのヒマラヤの生活を余りにも鮮かに思い出しての悲しさと入り混じった、複雑な一夜のようだった。

八月二十四日、五日、箱根・熱海・江の島・鎌倉へとドライブを楽しむ。

八月二十七日、朝日新聞社見学。

八月二十八・九日、山岳会婦人部の人々の案内で、デパート見物、買物、映画等々。

八月三十日、九月二日、山岳会婦人

部会員その他と、中房温泉より燕岳登山。この二年余りカルカッタに住むニマさんは「日本の山は急だ、アン・ヒッピー」をくり返しながら、さすがはヒマラヤの娘、元気に頂上に立ち、日本アルプスの景観に見とれ、シーズン外れの静かな山小屋で一晩を過ごした。下山時には、安曇野を見下しな

が「ダージリンは丁度中房温泉」としきりに説明してくれた。中房温泉での湯治は、これまでの疲れをすっかり洗い流してくれたようである。

九月三日、花を見習う。

九月四日、マナスル会のお招きで一日を有意義に送る。

九月五日、早大の学生の案内で、早大見学、並びにオリンピック前の国立競技場見物。折よく聖火点火の練習中であつた。

九月六日、日本山岳連盟の方々と日光見物。

九月七日、日本山岳会の歓迎会が、三井物産クラブで催された。四十名の出席者のうち女性が二十四名。ニマさんは絹のボクシーの盛装で出席、メッセージを読んだ後、山岳会から記念品として水晶のネックレスを贈られた。既に知人も多く、聞き覚えた日本語もとび出し、あちこちで楽しく雑談を交していた。最後に、ネパール・ソングの独唱や山の歌の合唱を行ったりして、閉会がおしまれ幕を閉じた。

九月八日、秩父宮妃殿下訪問。妃殿下はわざ／＼マナスル登頂記念の、マナスルの裾模様に入った着物を召された。時間近く談話された。

九月九日、歌舞伎見物、父母の掛けた席に座ってみる。

九月十日、エーデルワイス・クラブ会員の方々と梨もぎに行き、一夜を松田氏宅に泊る。

九月十二日、楽しかったスケージュールも終り、帰国の荷造りで多忙。荷物

は、弟や妹達へのお土産や、友人からの贈物で大きなトランク三個にもなった。夜、家族同様に暮らしてきた杉浦宅でささやかな歓迎会が開かれた。

九月十三日、一カ月の滞日ですっかり日本にもなれた彼女は、楽しかった思い出を胸に秘め、午後二時二十分羽田を発った。

最後に、離日にあたっての彼女のメッセージをかがげます。日本の毎日がたまた、楽しかった思い出としてばかりでなく、これからのニマさんの人生に少しでもプラスになるように、また日本で受けた数々の厚意を胸に元気で生きていくことを祈らずにはられません。(広谷光一郎・杉浦耀子)

3rd, Sept., 1964

Dear Friends,

How happily and cheerfully I spent my dreamy days in Japan. I don't know how to express my heartfelt thanks to you all.

All things I saw, touched and felt were so wonderful and nice. My late father had been always beside me all the time long here in Japan. To fulfill my father's desire, I will have to go mountaineering up to the Himalayas.

I would never forget you all who are so kind, sincere and helpful to me and what you have nicely done to my family and me.

Let me say again many many thanks to all the members of the Alpine Club of the Osaka City University, the Japan Alpine Club and the others.

Faithfully yours,
Nima Norbu, Sherpa

有志閑談会

恒例の六義園における本年の有志閑談会は、六月二十五日(木)梅雨時の夕、折からの落日に映える青葉若葉のあの美しい庭園に臨んだ心泉亭で開かれた。来り集う者四十二名、世話人心尽しのもの(大したものではありません)を傾けつくすほどに、あの古い庵は、またたく愉しい談笑と山々の息吹に明るく湧返るほどであった。先達の古き良き話、若者の新しい新しい話、実に楽しく心に残る一タであった。なお次回世話人として、

山下一夫、小野利次、今井喜美子の三氏をお願いしました。(島田巽、望月達夫、青木昇)

出席者氏名
牧野衛、辰沼広吉、山下一夫、松本善二、神谷恭、中村謙、古沢肇、山口三郎助、鶴岡元之助、桜井信雄、小野利次、田部重治、山崎安治、織内信彦、松本熊次郎、日高信六郎、岩永信雄、島山徳成、今井雄二、今井喜美子、野口未延、網蔵志朗、村井米子、原田幹市、金坂一郎、交野武一、坂倉喜喜子、佐藤隆太郎、関根吉郎、加藤泰安、藤島敏男、近藤茂吉、麻生武治、名須川浩、佐藤久一朗、高木菊三郎、三田幸夫、瀬名貞利、藤井連平、島田巽、望月達夫、青木昇(順序不同)

山岳第59年内容
一部訂正
会報三三四号に掲載した山岳第59年

ニマ・ノルブ嬢歓迎会

来日中の故ガルツェン・ノルブ氏の長女、ニマ・ノルブさんの歓迎会が、九月七日午後六時から三井物産クラブで開かれた。

出席者 辰沼広吉、吉沢一郎、加藤泰安、山崎安治、山野井武夫、佐藤久一朗、小方金弘、芳野越夫、松田雄一、沼倉寛二郎、神谷泰、折井健一、網倉志朗、川喜田二郎、岸野武、西堀榮三郎、山口節子、松永康子、芳野菊子、坂倉登喜子、須田紀子、増田洋子、橋本正、村井米子、三浦多美子、早川瑠璃子、松田柳子、細川沙多子、山本良子、武田育子、川森左智子、岡部浩子、富田美知子、杉浦耀子、三枝礼子、折井正子、林欣子、小原晴子、隈部恵子、早坂（順不同、以上四十名）

ニマ・テンジン嬢歓迎会

先に来日され、日本の岳人とも親しくなったテンジン氏の末娘、ニマ嬢がオリンピックを中心とした一ヶ月間、インド大使館の招待で来日しておりました。ニマ嬢の仕事は、オリンピックを機会に、インドの産物、殊に、インディアン・ティや各種の木の実などを世界の人々に知ってもらうための宣伝ということにあったようですが、こればかりでなく、オリンピック見物、世界青少年キャンプへの参加など多忙な毎日を送って居りました。

歓迎会は離日を二日後にひかえた十月二十四日、午後七時から、銀座サントリ・ラウンジで行われました。非常に急な連絡にもかかわらず、有志多数が出席され、コーガン女史のチョ・オニ遠征隊にも参加したことがあるという彼女を歓迎しました。橙色のボクトをまとった美しいニマさんはさすが

に登山家らしく日本のヒマラヤ遠征についても詳しく「皆さんよいクライマーでしょう」「皆さんにこの次はぜひインドでお目にかかりたい」などと、日本の岳人との交歓を喜んでいました。会からは記念品として西陣織のハンドバックが贈られました。

出席者 折井健一、辰沼広吉、田村扇一、錦織保清、網倉志朗、高橋進、山野井武夫、深田久弥、村井米子、松田柳子、高柳喜代子、杉浦耀子、山口節子、川合通子、早川瑠璃子、富田美知子、隈部恵子、須田紀子、鈴木文子、三浦多美子、大沢薫（順不同、以上三十一名）

新潟地震お見舞金について

前号でご報告したお見舞金（東京支部取扱）の合計額はつぎの通りです。
金五万六千参百四拾五円也

の内容中、田中栄蔵・馬場勝嘉両氏による「ヒマラヤ登山年譜（続）」は、他の原稿で既に予定のページを超過したため、残念ながら次号におくるのやむなきに至りました。御多用中いち早く原稿を寄せられた田中氏には既に諒承を得ましたが、会員各位へも御了解を得たいと思います。第60年号には一九五九年以降六二年迄を掲載する予定です。

（二三五号訂正）

▲誤▼

▲正▼

高野君の思い出
1頁1段 小島鳥水 小島鳥水
" " 一文を握 一文を掲
げた げた

（二三五号おわび）

前号図書紹介欄でつぎの二冊について紹介しましたが、編者の手落ちから書誌の記載を忘れましたので、おわびかたがたここに追記いたします。

◇ヒマラヤ・サイバル登頂
平林克敏著、二三八頁、昭和39年9月10日、サンケイ新聞出版局発行、四八〇円

◇石器時代への旅

秘境ニールギニアを探る
H・ハラー著、近藤等、植田重雄訳、二三五頁、昭和39年8月31日、新潮社発行、五五〇円

昭和三十九年十二月二十五日発行

東京都渋谷区原宿
一ノ〇四外苑コーポ内

発行所 法人 日本山岳会

編集者 古沢肇

頒価二十円 電話（總）六、五〇一、五

振替口座東京四八二九番

印刷所 株式会社 技報堂

東京都港区赤坂海池五番地